

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 福長 進

本論文は、漢文の官撰国史（六国史）が杜絶したのち、和文による歴史叙述として創造された『栄花物語』『大鏡』について考察したものである。序論、および第Ⅰ部「『栄花物語』の歴史叙述」の14章、第Ⅱ部「『大鏡』の歴史叙述」の7章からなる。

序論は、『源氏物語』の出現によって初めて『栄花物語』の和文による後宮と摂関政治の歴史叙述も可能になったことを明らかにし、また『大鏡』は摂関家傍流藤原能信を中心とする政治勢力の立場から、『栄花物語』の全体を相対化するものであるとする。

第Ⅰ部は、原資料との対比によって『栄花物語』独自の歴史叙述の方法を浮かび上がらせている。『大鏡』は万寿二年に語りの「今」を設定しているのに対し、『栄花物語』は「今」を叙述対象の時間と並行移動させる、超越的視点のない編年体であるが、史料の取捨選択、出来事の順序の入れ替え、また重要な歴史認識を登場人物の仮構された発話や心内語を通して集約的に表現するといった方法が用いられており、とくに藤原道長の栄華の絶頂であると同時に翳りの見え始める万寿二年には『栄花』も4巻を割き、小一条院や藤原斉信らの言葉を通して貴族社会の変容を浮き彫りにしていることを指摘した。また先行研究の手薄であった『栄花』続篇に関しても深く掘り下げた分析を行い、続編にも摂関家本流の立場から書かれた首尾一貫性が認められることを明らかにした。

第Ⅱ部は、道長の栄華の由来を遡源的に追尋する時間的視点すなわち系譜と、現象から本質へという超時間的視点すなわち人物に備わった胆力や宿運を証す逸話との交差によって、『大鏡』独自の歴史叙述が織りなされていることを明らかにし、大臣列伝の根幹部分は世代ごとに三兄弟が立伝され、その三兄弟それぞれに繁栄もしくは衰退を運命づけるような逸話の類型が割り振られていることを指摘する。また天皇紀・大臣列伝と藤氏物語・昔物語の位相差を丹念に解析し、後者において、摂関時代史の中で光孝・宇多朝と朱雀朝＝忠平執政時代の占める意義がいつそう深く説き明かされていることを明らかにし、『大鏡』の語り手の世継と繁樹がそれぞれ宇多天皇、忠平ゆかりの人物として設定されていることの意味を浮かび上がらせた。さらに『大鏡』において、諸大夫クラスでありながら実名表記される源政成、藤原資国、藤原惟経らがいずれも、東宮尊仁親王（後三条天皇）やその生母の中宮禎子内親王の東宮職・中宮職における能信の下僚であったことを明らかにし、これらの人物が『大鏡』の編述に携わった可能性を指摘している。

以上のように、本論文が精緻な考証と本文の丹念な解読にもとづいて、『栄花物語』『大鏡』の成立過程と歴史叙述の方法を明らかにした功績は高く評価される。よって審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。